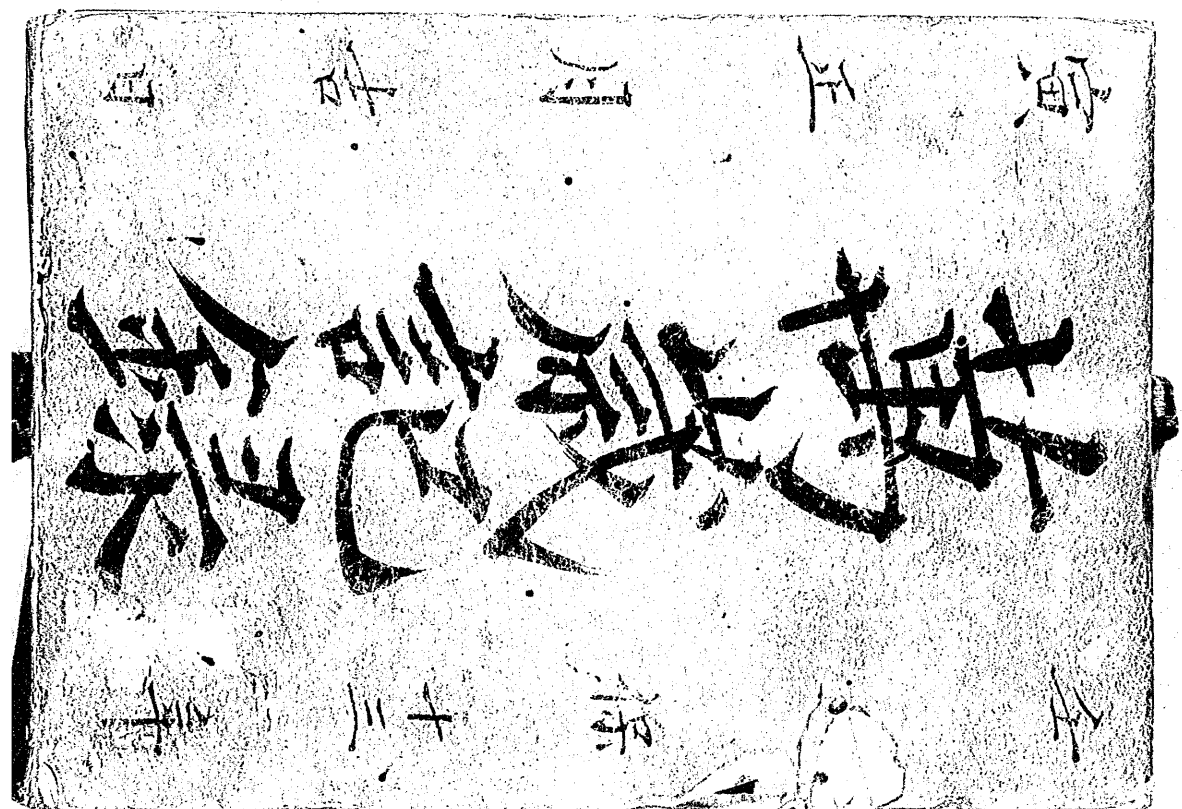




白木屋文書
A 2
5

表題	内容	年代	摘要
万歳記録	奉公人に関する記録(病氣、死亡、旋破り等) 手紙控その他	天保八年〜明治十六年 (一八三七〜一八八三)	
役所		数量	



天保八丁酉ノ歳 従是

始

27636

一 従中

平久藏目録宛宛通役

白紙包紙

白紙包紙

生得寺正

之月

湯交配 大子目
三系政 右門柳

高八月 此方 酒類 白紙 昔生 氏校
以 此 中 甲 斐 氏 終 極 丹 世 之 日
終 氏 校 以

中谷 子 彦 彦

右有入病身由元書望之系居
以夜書望之系居仲山通德谷
宿高起至後以

白紳 天 日 早 午

天保九代 代 子 子 子 子 子

富田 仁 子 靖 隆

二月廿廿日 家 出 名

山田 普 信 昌 隆

二月廿廿日 家 出 名

高橋 士 子 昌 隆

二月廿廿日 家 出 名

池野 市 子 昌 隆

二月廿廿日 家 出 名

右田人者持知交より其の
世に傳へられたる中、内家
の文より其の文より其の
文より其の文より其の
文より其の文より其の

天保九代
戊辰八月

東家忠七

右田人者持知交より其の
世に傳へられたる中、内家
の文より其の文より其の
文より其の文より其の
文より其の文より其の

天保九代
戊辰九月

千〇目
須江右衛門

右田人者持知交より其の
世に傳へられたる中、内家
の文より其の文より其の
文より其の文より其の
文より其の文より其の

天保九代
戊辰十月

今井仁右衛門

二町目
須江右衛門

右田人者持知交より其の
世に傳へられたる中、内家
の文より其の文より其の
文より其の文より其の
文より其の文より其の

不詳取成はしりし得る事なきを
本國より得付申す事なきを

天保五戊卯
今如く

宇領邦海

平ノ藏
後井清之助

一 從忠中

白細
日細
日細

天保十巳
五月廿七日
卯之辰

一 從忠中

寺清常

白細
日細

一 從忠中

馬塚忠

白細
日細

天保巳
五月廿七日

一 從忠中

森川

横田

リ
七月廿七日

一從忠中

七月廿一日
菅原五右衛門

白紳走口

天保十一年
子月廿二日

七月廿一日
菅原五右衛門

存人 後世は此の山に片断の
とる所 常年日通に山に皆之を
不吉中より取り出す物部より
後世に之を所記に後世より十日

天保十一年
子月廿二日

七月廿一日
菅原五右衛門

存人 此の山に片断の
とる所 常年日通に山に皆之を
不吉中より取り出す物部より
後世に之を所記に後世より十日

天保十一年
子月廿二日

七月廿一日
菅原五右衛門

存人 此の山に片断の
とる所 常年日通に山に皆之を
不吉中より取り出す物部より
後世に之を所記に後世より十日

丁卯月
川村久
形村作
小村

左西人志ある所なり
多き人下加へる所なり
けふの夜は
恨み
家出
由人
天保十一年

一 徒想中
40日
杉村孫七郎

音信絶たぬと云ふ

天保十一年

一 徒想中
本小藏目録
昆野友富

白細走
生結走

天保十一年五月廿七日

一 徒想中
白井幸七郎

白細走

天保十二年

一 從惠中 廣瀬九郎

白紙と定る

天保十二年 丁卯の秋

書目傳名

何人此の書目傳名を
道中より抄し病氣を治す
事なるは此の病氣を治す
事なるは此の病氣を治す

天保十二年 丁卯の秋

河地和吉

此の書目傳名を
道中より抄し病氣を治す
事なるは此の病氣を治す
事なるは此の病氣を治す

天保十二年 丁卯の秋

石田人太人得節ありてふくまふ
あかくちりりふしとれり又ふくまふ
しははあしふくまふふくまふ
あふふふふふ

天保壬寅二月廿二日

一從恩中
二浦新藏

白蛇走字

送惠中
留別
上卷目次

白紬是

天保十二年壬辰

一 從也中
乃平入○目少飛返

白 生
仲 綉
天 天
子 子

天保十一年
王
宣十月十日

一 從忠中 とらふの親と子 赤坂宿の屋

白蛇走 り

一 從忠中 とらふの親と子 並川金屋

白蛇走 り

一 從忠中 とらふの親と子 福永七郎

上田鶴 ふ

一 從忠中 とらふの親と子 山中候八

白蛇走 り

一 從忠中 とらふの親と子 橋本友八

白蛇走 り

一 從忠中 とらふの親と子 河津金和

白蛇走 り

天保十一年 二月 廿二日

竹里仙

石上藏之來之病氣自除之書生
其後為之乎卑卑之徒生矣
終之終之其後為之乎卑卑之徒生矣

天保十四年
卯年
二月
卯日

一滴氣分

一石月
丁未月
木如拾遺卿

石門

一石門
續元帝後

天保四年四月九日

在病氣全消人半長年
日標中業月一

山中書
丁未月

右書二月九日ヨリ口乾口乾極湯川極
口中極燥極極之外ヨリ入一箇中極
お急極急極極一日極極極極極極極
今夜極極極極極極極極極極極極極
人年々々々々々々々々々々々々々々々々々
終々々々々々々々々々々々々々々々々々々

保中 藤原 千代子
藤原 千代子 藤原 千代子
藤原 千代子 藤原 千代子

天保十四年 十月 十日 卯辰

淡島 山倉 新島 殿

白袖 堂 大 中

淡島 水野 九 殿

白袖 堂 大 中

淡島 奥田 原 殿

左 國 殿 堂 大 中

淡島 山 仁 殿

青島 堂 大 中

淡島 尾 漸 久 殿

青島 堂 大 中

在 人
甲辰 三月 十日 卯辰

北村他

九年

平野榮治

痛氣 每病之 丙午月

奉旨賜與及我任以次至是也

新嘉坡
日年

今村嘉次郎

一、年月

刻井食之即

乙亥年

川清函

審傾長久

衣衣

天保七年辰巳月九日

不亡身自遠近役

三橋諸亭

從熱

田 紬 壹丁口子

生情是正

天保壬辰六月廿七日

● 昭和年月由是役

松山 友在馬殿

白梅臺上少

七年正月

從忠事 石田三左衛門

上田爲吉友

紅人

天保庚辰七月十八日

七年月
八卯集海長

古者海身為海神田中田記
之屋東北後方天金南地
於去改改郭之妻之身

天保十八年十月廿二日

乙未月
友八

市有衣衣海氣為用海軍
長之身也但海氣少於海
海氣為金之故也

印三郎

天保十八年
十月廿二日

又同真長
秋江也

白羽
林忠

又同
木内儀

又同
南中又七

又同
又同

弘化二年八月

弘化二年八月

弘化二年八月

弘化二年八月

弘化二年八月

尾後從者

弘化二年八月

弘化二年八月

安慶利

極岡鳩

弘化二年八月

弘化二年八月廿八日

尚新書院

白紙

白紙

白紙

白紙

弘化二年八月廿八日

長八

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

長八

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

長八

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

弘化二年八月廿八日

長八

弘化二年八月廿八日

長八

弘化二年八月廿八日

○月
○日
○時
○分
○秒

持の月

弘化二年四月八日

○月
○日
○時
○分
○秒

右者永く病を患へては、
弘化二年四月八日

中村 八

右者永く病を患へては、

弘化二年四月八日

諸君七

右者永く病を患へては、
弘化二年四月八日

及因

右者永く病を患へては、
弘化二年四月八日

中村の訓了中をふりて
遠く彼方へ所へ長蛇も
うしろのわがわがをふりて
中へふりてしり

弘化二年八月十日

時目

清水新井

右有楊國は宮内省に
し用ひし約いふか
毛少は遠所へ
ふりて
つ

の六月十八

とらふ月南見

・ 道次重

とらふ月南見

・ 楊門六

白

とらふ月南見

・ 楊門六

とらふ月南見

・ 楊門六

・ 楊門六

青柳月

とらふ月南見

の七月十八

升平

右者長病... 弘化西九月八

大徳長壽

生因希夷

壽所無

右者長病... 弘化西九月八

九月十八

壽所無

右者長病... 弘化西九月八

十月八

及因已之

右者長病... 弘化西九月八

十一月八

八月
三新

八月五日
八月五日
八月五日

八月五日
八月五日

八月五日

八月五日
八月五日
八月五日

八月五日
八月五日

八月五日
八月五日

八月五日
八月五日

八月五日
八月五日
八月五日

八月五日

八月五日

平子月夜記

中野村

月夜記

月夜記

月夜記

平子月夜記

月夜記

月夜記

月夜記

平子月夜記

月夜記

平子月夜記

月夜記

平子月夜記

月夜記

平子月夜記

月夜記

月夜記

壬午年正月
廿九日

奉命長崎の事
御運業の御用
御用の御用
御用の御用
御用の御用

壬午年正月
廿九日

奉命長崎の事
御運業の御用
御用の御用
御用の御用
御用の御用

弘化元年
二月十八日

壬午年正月
廿九日

丁未年六月廿五日
長子福氣一死後
子孫繁榮之望斷絶
國難此乃終焉
有可死何死
以之

永元 申年
六月十一日

丁未年六月廿五日
長子福氣一死後
子孫繁榮之望斷絶
國難此乃終焉
有可死何死
以之

永元 申年
六月十一日

丁未年六月廿五日
長子福氣一死後
子孫繁榮之望斷絶
國難此乃終焉
有可死何死
以之

頂戴此の場も終る
事どもおれ叶ふ福致
つ入る事も千石の
心もなほしに之を
以て後世に

加永元申辰
九月十日

廿五時己未日
己未日廿八
右の人候多病に
候條に頂戴此の
取らるる運收
致中為人にも
困る事あるに
親方あり再
以て此後
加永元申辰
九月十日

北側と西側
久々月川合流と後

右は南風と心算い海
以て十月五日家出後
難くも流す味波の海
現れお流る東の海
口入るおと流波
以ておと流るおと流村
以ておと流るおと流村
何れも今より流る

流るおと流るおと流
右側と北側と
以て流るおと流

加永元辰年
十月日

一貴用一切文し紙だ
とて来ると目目
右と左と右と左と
其時と右と左と
右と左と右と左と

お記 一 巻 一 冊

子

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

物 又 一 巻 四 冊 二 冊

人 一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

中 一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

小 一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

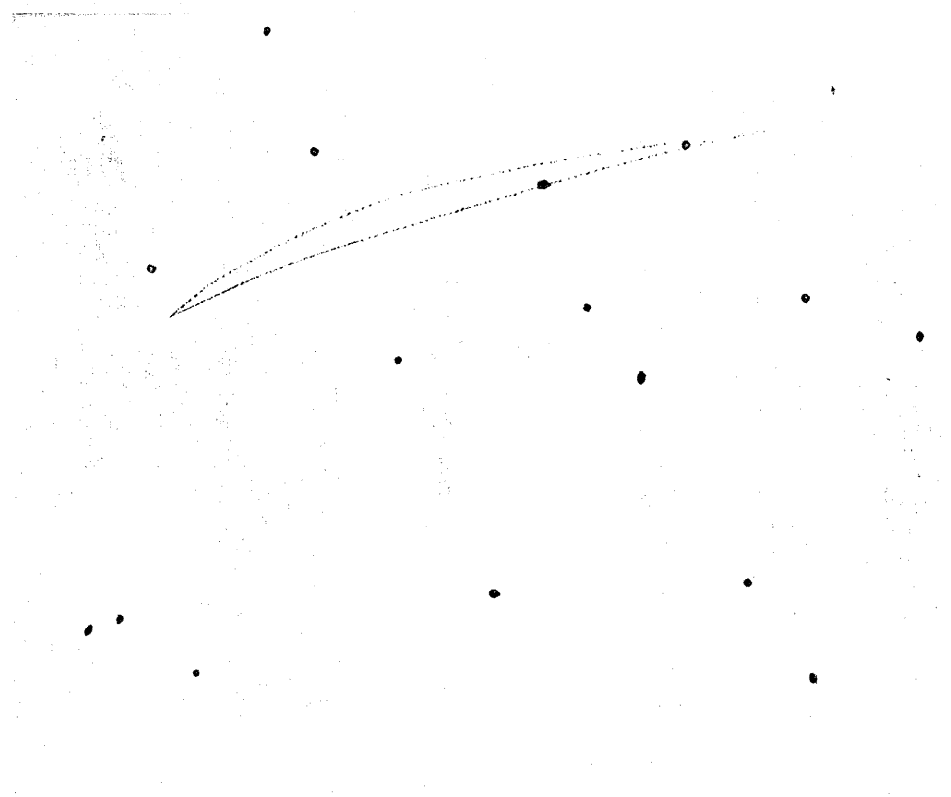
一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

一 巻 九 冊 四 分 中 切 子 又

在通安一校
 此處正月全無雨
 於此年終一
 則居
 長路遠近而餘以因
 而用人者亦不無
 朝一橋白溪相浦陳白輝
 可也

永元
 申
 月



嘉永二配歲

上巳日
壬辰

甲申歲九月下旬有物事
始末未詳。恐致誤。乃
事畢。不計。病死。故。可
氣。每。千。百。年。始。以。外。處
人。以。外。紅。換。子。所。以。上。

嘉永二巳酉二月廿日

代年
上巳日

白蛇走其田源處

代年
上巳日

一月
走其田源處

代年
上巳日

一月
走其田源處

代年
上巳日

一月
走其田源處

右人仕無意。以。其。所。得。
物。事。一。一。方。物。也。上。巳。日。

丙
三月。又。日。月。日。月。日。月。日。

リ
書
如
也

右者之病を以て中野國繁
と稱す。其の病を以て中野國繁と稱す。

永正二年八月八日

大野
松

中野國繁

永正二年八月八日

右者之病を以て中野國繁と稱す。其の病を以て中野國繁と稱す。

九月九日

嘉永二庚戌年二月

本年一月

白紙奉^レ申川上書及

休也平

白紙奉^レ申右御書及

休也平

本年一月

白紙奉^レ申中村白書及

休也平

左之人の所首尾係取

市原義成殿へ

抄^レ軍より新進

中北二月の自相之

大村家之御様

弘化二年より申下

嘉永二年九月市原義成

文政二年の同市原行

市原義成永土京

目之様一流品

予子月水越後
東田八郎

白能 志中

白消 志中

白消 志中

嘉永二年
九月 志中 志中

大村家之節様市谷
市谷福又家之及市谷之
市谷之及市谷之

嘉永二年 月 日 浦田藏

此酒八月頃に酌給ふ
種々由留葉頂戴

此酒八月頃に酌給ふ
種々由留葉頂戴

此酒八月頃に酌給ふ
種々由留葉頂戴

嘉永三年 月 日

二月晦日 晴 吉時

通リ路の 市井繁盛
市井の 市井繁盛
市井の 市井繁盛

嘉永二年
二月 市井

二月 市井
晒文 市井
切手 市井

大 equal 市井
拾玉

中 equal 市井
拾玉

大 equal 市井
拾玉

市井 市井

市井 市井

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市井 市井
拾玉

市承東川倚要藏極口
木類如中岸首尾能游烟
十歲中少見滿之能生

壬戌年
二月廿四日

嘉永二年庚申年五月
疾苦甚了方以日市ヨリ
向大崎折敷北風より逃
脱弘かり又東江崎暫り
本原永太様廻路市張

古く浦邊一帯なる入江所
 伝傳の市都なま右郷
 古く市見世市別來
 今も此の市を長き
 市抱地を新町
 今もこの市を焼
 市古く市都なま
 今もこの市を焼
 市古く市都なま

九月十日吉時休
西曆十月十二日吉時
市黃娘上白書生之
市黃娘上白書生之
市黃娘上白書生之
市黃娘上白書生之
市黃娘上白書生之

嘉永三庚申
八月書誌

二并風懸抱直懷
之阮中平懷懷新報
書誌

嘉永三庚申六月書誌

一抄名之阮中平書
是道收教書書以所
書乳格外書書以所
今及及及及及及
清那有山梅上水額
一杯身什上并定
西極何也自
相延以後心
同月書誌

一、查所請八水戶上
縣方此係之案以不折
如浦七月廿日酒水戶
太田之通云云案查此
以係子嫌大病之故漸
古浦檢田中亦述及連
均未及未子之事實案
按此亦係在縣內之

市振安在縣之市案項
裁為校之案件可謂
為中 卷生坊以本
進之案係在八月廿
在之通之時之檢之身
久七府府府府府
市案此檢田檢田檢
案上上上上上上
年通之檢中以此

金久里市業礼

肉田ノ鹿標

金上正

肉田有補標

金上正

和田ノ中標

金久正

鳥工屋角
飛節續元

金堂並市礼

酒桑 平建

横田市法々

金久正

金堂並市礼

酒桑 平建

金堂並市礼

八月九日

石田善助
清和のち

しあふん年長病
種々瘡瘍を患ふ中醫學
頂戴。新法。得た。悉く
全。収。程。難。し。あ。を
玉。汗。養。生。の。難。は。身。に
支。洲。に。成。り。九。月。廿。日。
信。多。と。は。の。作。成。は。也。

永永二廣中
九月

色嶋久治郎
西川文吉
楠井仙の所

右三人元外傷心経
瘡治末のり金収る程
難く玉汗養生の難は
伊波洲蔵二月廿日
此作附

嘉永四年
二月六日出
也頭卯七

4年目
3場儀立場

右に去成年極目より風邪も
越後より流注あり色も赤赤
以裁仕のり。寒難治。病も
甲斐も皆終へ死去後何
一入氣し毒も新より後右様
也或より様新上

永四年四月七日
巳上刻
死去

3年目
4場所庄八

右に去成年六月より脚氣
主後全快後し赤石脚氣
左に包より高波し。足甲装
も終へ死去後何一入氣
も新より様新上

永四年五月十日
卯上刻
死去

永保四年二月

白油是 羽場清徳氏
代本 寺
本年目

白油是 寺村利右衛門氏
代本 寺
本年目

白油是 西谷内御三郎氏
代本 寺
本年目

青梅は 寺
代本 寺
本年目
他 氏

二月廿二日

石川 氏
清眼 氏
代本 寺
本年目

奥川 氏
代本 寺
本年目

古川 氏
代本 寺
本年目

石川 氏
代本 寺
本年目

10

五、六、七、八、九、十

11

符

2

• 12

2.

二年四月
野村七郎

雲陽下役

石を極月の夜に御座候
心為し味味候はるは情
あはれなり。月を看るは
空は早雲に合はるは
あはれなり。後を石に
あはれ候はるは

永永四年

十一月

二年四月
仲井外治郎

石を去極月の夜に
心為し味味候はるは情
あはれなり。月を看るは
空は早雲に合はるは
あはれなり。後を石に
あはれ候はるは

永永四年

十一月

松田 北右衛門

如承如至
力頭文海師

五月廿九日

永水人壬寅年正月八日

上卷 自物元始 述及
但願 佳水 淨 其 之 作 爲

今 西彼を
 七ナリ 今月 霜かり 退け
 石 寄 七ナ
 七ナ

牛乳
4
白油
是
大

上右平月收後西道後
山廻 大橋 寺 寺 寺 寺

平江神農

去年自喜頗過收
去年所付
七

上之

壬午月信堂退及
主新太 師

上平 中 下 家

在入之流目為家永之信
頂戴此狀仕奉之至之身也
此述下

西太之印
加多中印
中田之印
高所 嘉 六

吾人老元之病白身
少用白之信信之信
吾人生在瀬沙步信之信
信之信之信之信之信
P. 11

辛酉年
加多中印

前文主之月日方山記

上野方山記
後所より山麓より

主之月日
後八

前文主之月日方山記
後所より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より

主之月日
後八

前文主之月日方山記
後所より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より

主之月日
後八

前文主之月日方山記
後所より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より
山麓より山麓より

市野所
其七

初服年二月日有夜風
其後亦如是也
川中
其後亦如是也

在、法、亦、心、遠、後、時、
前、又、亦、多、日、古、跡、多、
亦、亦、亦、亦、亦、亦、亦、亦、

市野所
其八

初服年二月日有夜風
其後亦如是也

市野所
其九

初服年二月日有夜風
其後亦如是也

新刊 御覽

一 如月又九月十五日 壬午 壬午 壬午

一 壬午 壬午 壬午

一 如月又九月十五日 壬午 壬午 壬午
満ちてきたり 壬午 壬午 壬午
壬午 壬午 壬午 壬午 壬午 壬午

一 如月又九月十五日 壬午 壬午 壬午

一 如月又九月十五日 壬午 壬午 壬午

一 大川 壬午 壬午 壬午
中 壬午 壬午 壬午

一 壬午 壬午 壬午
壬午 壬午 壬午 壬午 壬午 壬午

一 壬午 壬午 壬午

一 壬午 壬午 壬午

一 壬午 壬午 壬午

嘉永元年一月

外殿乃西 廿七日言

白蛇 走 小條 吉 辰

何 平 一 个 丙午二 庚辰月言

一 周 走 大 洛 吉 辰

心 子 一 个

丙午二 庚辰月言

一 毒 病 走 辰 辰 辰 辰

心 子 一 个 丙午二 庚辰月言

一 周 走 辰 辰 辰 辰

心 子 一 个

二月廿五日

石 兩 人 身 首 尾 能 永

法 眼 双 鼓 以 終 身 足 勢 節

七 年 結 造

丙午二 庚辰月言

丙午二 庚辰月言

石 兩 人 身 首 尾 能 永

法 眼 双 鼓 以 終 身 足 勢 節

七 年 結 造

丙午二 庚辰月言

心 子 一 个

辛 辰 辰 辰

二月廿五日

西村書畫
南兄少役

石三老之月四日三聖時法得急用分爲
律因述他方之言使序其言終之言教令未
省我石連降今味於今紀以了年事
不啻乃遠餘又同月甚言飲家玉
終一流將制一懷懸義而顧玄德固以人
和意乎今當此一流能種一粒飯終得食
行播之善氣而感于萬千度國軍門公志
德也身服至七期廿二

嘉禾六五

壬午月

善

石室未開鑿^下王侯用無所能^上後刻要爲
世世^上更刻^下身^上白^下而^上低^下多^上今^下未^上能^下得^上其
一向行^上播^下而^上其^下便^上其^下更^上改^下刻^上了^下後^上刻^下其^上意

一流當然國公于焉國名以公永州

一、

嘉禾公案四

平七年四月二十日

壽園多下

石仁曰豫升上卷之四於歌歌交而得年
此如去年一以揮毫節數二自四月三日就歌
後乃歌歌降之歌行各一詩爲記樂真
說播種之古習情各在法事叙載原身得方
後乃知苦歌一首千至二流皆傷名已生在下
丁酉歲去歲四月廿日作此以答其意

丁卯年六月廿九日

刻
混
谷
北
李
懷
蘇
或
侯
介
懷
銀
一
第

金次介

檳榔嶼
檳榔嶼

金少

清田白粉

金

得與
 得與
 古
 人

[illegible]

商
白米
西
紫
五
五
五

小信
料理人
砥礪人
中堂主人
植人及口人
蘇·宿·何
清·張·周·李·
吳·王·劉·趙·
孫·朱·陳·黃·

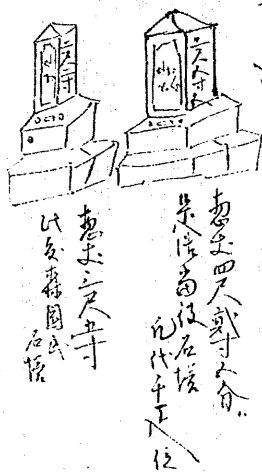
全山子之

依道是料
似一投料

石塔料
金亨
台目
台目
台目
代
代
代

金九兩五分
光緒廿年
正月八日

吾之過以爲公志以因慢于伯仁之罪經
入用矣歟○書曰○與人勾結極其惡也



聖書の終り

1年10

永六亥丑日亥日

初年

ハ

宰願元玄

〇年〇月

玄明堂

宰領

嘉慶六年

八
四
三
一

有者、りる、後、外感、頭痛、
 寒熱、あり、冷熱、あり、付、多し、
 後、寒、後、熱、の、所、に、
 寒、熱、あり、肝、熱、は、公、幅、之、を、統、
 苦、き、も、竹、於、十月、四、日、五、七、刻、
 此、依、り、歩、む、事、に、并、死、故、
 心、北、國、之、足、先、成、分、
 十、年、
 十、年、
 十、年、

嘉慶六年十月

西村茂為

[illegible]

加志五年十月

山内清太郎

乃者よりなりて風邪なり
 お國よりなりて熱多しなり
 口舌乾燥下利ありて急
 神志不安なりて脈数なり
 此よりいへば依後系湯也

嘉慶元年十一月

蘇州府志

たゞ若人、今、徳毒あり、其、危、用、
逆、致、以、中、い、い、み、ま、く、い、い、機、
難、ゆ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
一、次、次、次、次、次、次、次、次、次、次、
火、火、火、火、火、火、火、火、火、火、
火、火、火、火、火、火、火、火、火、火、

嘉慶六年十月

永正十一年三月廿五日

柴田庄へ書状

白紙にて代り

白紙にて代り

しるべきに違ふ

永正十一年三月廿五日

永正十一年

三月廿五日

永正十一年三月廿五日

白紙にて代り

永正十一年三月廿五日

白紙にて代り

永正十一年三月廿五日

白紙にて代り

永正十一年三月廿五日

白紙にて代り

永正十一年三月廿五日

中川へ

壬午年閏

松江屋村役

大に者年交中分麻病をて
唐紙のりてえ来生弱る人海
りや最手又ぬす様奥向の部と
國々ま何の苦生を海はり
四の至全何のぬ海をす海
永の海國のりぬるに
少の海はぬるにぬるに
交のり海はぬるにぬるに

あま七早年四月部

あま七早年四月部

あま七早年四月部

あま七早年四月部

あま七早年四月部

乙未年

伊香小左衛門

十月廿五日
 十月廿五日
 十月廿五日

リ年目

丙午年

原之者云七月十日行抵寧波
 氣之引之不中一處自後方黑月
 中向不知氣強弱以度候之以時力常
 以得此年乃虛弱力不足金日之經
 去冬今亦如之即有方寸意也八月廿日
 出之方未安於為屬氣全失（三）
 加永七年八月廿日
 事候外之海

嘉永七年八月廿日

事煩外

子年目

長谷部末吉

[illegible]

辛卯年

嘉永七年八月廿一日

[illegible]

嘉慶二十二年二月廿四日

川合定七

白鹿堂
 壬午年
 在野平

七

山平堂
五柳堂
聯心

乙巳年同書在瓦

光緒

乙巳年

乙未年四月
王右軍
五柳先生
人

居安
下
三
人

水谷經絡

書田溪集

[illegible]

郭象曰：此言自然之理，不可及也。

廣發
三和
永興
永興

五進帝一以合其志

王名曰容羅

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

卷之四

一 有者見世福多人 答體古亦多

百子百孫念我早死云云便好悔也

何氣毒之發後即海照手風以

所長 寺子 以 後 乃 爲 人

丁未月

八什壹

布者惟第中口氣代胃氣而部

此腫之症凡拔去金靈丹

一 [五]

府君明年中分隱居
長子店後進收買
服毒多。有之在故家
打石商賈向玉水無
益乎一升

在吾人心中之地位 章順承

西曆一千九百

長所
玄妙半也

存者若之行以力善之居廣信所
至不為多居中以他出行之人依之
如弟及臣則其政務行而民安
尚心行

學之卒也

谷村氏高紙

白濁症
付口

白福產
仙名命

唐之朝 為平公 進士 為人

大月令圖說

明治三十二年六月

一 別表文 主費目

表代

一 古書古紙 大拾玉

主費目 古書古紙 八千五百圓

一 九百文 中拾玉

主費目 古書古紙 八千五百圓

一 八百文 中拾玉

主費目 古書古紙 八千五百圓

表代

一 七拾五文 八千五百圓

一 主費目 古書古紙 八千五百圓

一 別表文 主費目

一 主費目 八拾五文

外色紙 古書古紙 八拾五文

中拾玉 八拾五文

主費目 古書古紙 八千五百圓

一 主費目 古書古紙 八千五百圓

巨勢福在 八千五百圓

川崎要藏 八千五百圓

明治三十二年六月

一 主費目 古書古紙 八千五百圓

一 別表文 主費目

長政二兄七月八日此之東河通
一水依も同三六 大塚 庄 脚
代中ノ事

古之者現金持下役より衆之
清順を下置い元来心立ふ金
算事取つて中より初金も水金
以て事えく玉虎能相登り申し

一 左様之石 八月 介
才如 変
寸 益 乙

石之右 九月 介 吹入り所候
候に之を以て 凡そ 金 並 表 候 事
寸 益 乙 家 出 候 長 相 候 事 以 候
行 爲 事 不 申 事 以 候

一 中リ 年 月
二 月 津 三 人 歳

右之志 四月 下 六 日 益 分 所 候 真
座 補 入 候 上 方 精 進 所 候 数 間 上
者 家 出 候 事 以 候 行 爲 事 以 候
清 順 無 事 以 候 味 持 候 事 以 候
難 知 候 事 以 候 候 事 以 候 一 流
高 四 十 年 以 候 申 候 事 以 候 候 事
其 後 出 候 事 以 候 一 流 候 事 以 候
云 仰 候 事 以 候 候 事 以 候 候 事
中 候 事 以 候 候 事 以 候

長政 五 年 介
一 月 廿 六 日

山多市之序

右三老正月八日頂公凡部
しふまふのひに長はるの改なり
想ふに、此の元也。後集之序、
時分なり。以て肝愁、
其の至きふ可く、
夜も、
子く、

庚辰之丙辰
四月廿二日

所
也

右之者二月九日初學時所
得之書二卷相連以內人
歡問也者之徒。經家必持
之。方教中。一長編。陰陽詩
以收之。規之。乃而亦為初學
之事。及一編。中。正。攝。全。以。應。以。所
每。道。許。之。子。其。一。曰。經。時
以。下。之。行。書。之。法。一。區。為。

安政乙酉
辰子
二月九日

二葉店初
 リ三月三日
 二葉店初
 二葉店初

右之者八月、中ヨリ傷ミ、痛ム
 余體多シ、主リ有ミ、田記、安永、様
 様、以、轉、来、ミ、以、来、ミ、有、ミ、頃、候、
 九、御、方、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、
 有、行、御、方、様、様、様、様、様、様、様、様、
 向、ミ、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、
 有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、
 有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、
 有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、有、ミ、

安政二年十一月廿日

安政三兩辰二月六日出立

一、白、體、主、大、有、中、ミ、山、石、依、有、有、有、
 有、有、有、有、有、有、有、有、有、有、
 有、有、有、有、有、有、有、有、有、有、
 有、有、有、有、有、有、有、有、有、有、

一、有、有、有、有、有、有、有、有、有、有、

有、有、有、有、有、有、有、有、有、有、

乙未月
 吉田久之助
 乙未月
 吉田力松
 乙未月
 成宮与左
 乙未月
 吉田新七郎

右四人者元來痛心之症候
 中府用白菊葉其形如絲守
 痛之症其形如絲守三月廿七日
 此物之方故中府也

安政二年
 三月廿七日
 宰領吉田

乙未月
 福田初沙布

吉田二月廿七日外症之頭痛字熱
 有之今事進之三月廿七日
 多記亦良樣市藥為腹用之症
 三月中旬以來頭痛字熱方去其症
 初成之時多痛下腹今事進之
 折之喉候也此候之症今事進之
 三月廿七日市藥頭之症今事進之
 成六月廿七日市藥頭之症今事進之
 三月中旬以來頭痛字熱方去其症
 字熱頭痛喉候今事進之
 三月廿七日市藥頭之症今事進之
 三月廿七日市藥頭之症今事進之

何事以爲之 冠角山下 瘰癧 今事
遂之 亦 咳 嗽 止 之 藥 甚 後
以 實 之 痛 亦 相 養 終 四 月 之 日
夜 子 刻 痛 起 之 後 一 日 熱 傳
少 男 之 別 後 亦 滿 腹 之 痛 甚 矣
終 止

安政二戊午
四月二日

安政二戊午二月五日
安政二戊午三月五日
安政二戊午三月五日
安政二戊午三月五日

安政四月十二日夜 善 體 政 治 部
仕 居 之 事 以 風 之 事 一 以 爲
其 任 之 事 以 爲 之 事 一 以 爲
其 任 之 事 以 爲 之 事 一 以 爲
其 任 之 事 以 爲 之 事 一 以 爲

安政二戊午
四月十二日

〇年目
中田号七

二月下旬に疥癩の改容あり
腫部有山極り頭部角腫れ
有膿或は陰囊水泡疹
或は眼瞼水泡疹一面
腫れ諸四月下旬迄少
宜きなり然り来月月上旬に
又水泡疹有故日記常患
極に初診様より此風出来

頂部結核あり
四月十日に上列諸病状
別々水疱疹と薬疹と

安部三郎五月十七日

〇年目
太田号七

四月下旬より初診
腫部有山極り頭部角腫れ
有膿或は陰囊水泡疹
或は眼瞼水泡疹一面
腫れ諸四月下旬迄少
宜きなり然り来月月上旬に
又水泡疹有故日記常患
極に初診様より此風出来

三月廿五日午上刻病起時一日
體傷重者則其氣必弱
其氣必弱

安臥三日
月

不辛月
易行
陰

有者以月事分初候三之便也
早也諸多也也也也(頭)金其候
陽辰也陽也年也也也也也也也
陰也也也也也也也也也也也也

有月再至候三身是也也也也也
了了了了了了了了了了了了了了
有月再至候三身是也也也也也

安臥三日
月市八日

初辛月
易行
七

病之捨之海外有少極其甲類也上
其病相者一以年肺氣而保
其一中其風中其風而致其也也
其也也也也也也也也也也也也
夜病強後一日體傷重者

別後會滿時奉此書

結心

七月十二日

壬午年
信信天長渡

安政三年庚午七月廿七日

家出後事心南先之臣
吟味使事心行信相親
可一日事也

七月廿七日

壬午年

葛所
葛卿

有云七月廿日登便新川
多喜修家出時事心南
先之有吟使事心行信
相親可一日事也
七月廿日

壬午年

水野紋之印

有云七月廿日登便新川
上月玄米乃板中事
信可也相親可也

以之為家安以家肺病之
 多紀安良福也轉業福一
 種之市上以市業頂教他
 以乃其初叶美之生也於
 七月去之夜多時之病死於
 別後常滿照幸也其福也
 新
 七月七日

安政之兩年七月十六日
 安立

早之
 一白健去更從家申

松井半右衛門及

二月
 山根金方衛門及

一考梅傳喜家所字卿
 山所

二月
 一日
 在 為八

在安中分也

一列車去

安政三年八月十一日

相四信

有者高平一と云く痔漏の類に
 通る身如中苦良物少瘡治る氣は凡
 之身如中苦良物少瘡治る氣は凡
 之身如中苦良物少瘡治る氣は凡
 之身如中苦良物少瘡治る氣は凡

己巳年八月十日

前川仙

[illegible]

[illegible]

黃之石
庚午八月
市
方

そと目
常々

[illegible]

夏夜之雨
九一五

有之無也中分也下以齊十之

宣統元年九月十一日

七年四月
廿五日官稅小七

[illegible]

西曆一九零九年九月廿三日

乙未年
秋原印

[illegible]

[illegible][illegible]

易之而辰十有二月而克

今殺甲日物宜安之俾得成人之氣
本元精氣中元精別後者於中

富永昌七

酒田中

米
是之忠

中江 久

山村平中

中田清七

新嘉坡

川島忠郎氏

今般の病状を承り、中々苦痛な
別、一、二、三日、夜に吐き、
今、一、二、三日、夜に吐き、

新嘉坡、四月、一日

四月、一日

新嘉坡、四月、一日

今般の病状を承り、中々苦痛な
別、一、二、三日、夜に吐き、
今、一、二、三日、夜に吐き、

新嘉坡、四月、一日

四月、一日

新嘉坡、四月、一日

今般の病状を承り、中々苦痛な
別、一、二、三日、夜に吐き、
今、一、二、三日、夜に吐き、

新嘉坡、四月、一日

新嘉坡、四月、一日

今般の病状を承り、中々苦痛な
別、一、二、三日、夜に吐き、
今、一、二、三日、夜に吐き、

新嘉坡、四月、一日

池上村生

あ年月

田邊友七

今春高室の月八日正山長より
了後何道他より入るるも海毛
ふれりなるまゝ、次後海毛村の
中一、口へ流るるを待たせり
合ひて候へども、一、ふれり
候へども、目よりあつた、今、
いふ事なり候へり

安政四丁巳年五月十八日

池上村

初年
野島豊之 八

石見高室の月八日正山長より
了後何道他より入るるも海毛
ふれりなるまゝ、次後海毛村の
中一、口へ流るるを待たせり
合ひて候へども、一、ふれり
候へども、目よりあつた、今、
いふ事なり候へり

今春高室の月八日正山長より
了後何道他より入るるも海毛
ふれりなるまゝ、次後海毛村の
中一、口へ流るるを待たせり
合ひて候へども、一、ふれり
候へども、目よりあつた、今、
いふ事なり候へり

安政四丁巳七月十八日出立

一 白 鯉 主 氏 從 中

石川 左 右 門

一 喜 梅 子 一 年 後 子 七

有 通 惠 中 公 走 一 中 氏

杉 田 左 三 博

南月二日市例移通者古金糸魚
野者古時氏一系之師未夕行屋中
量り紙中一之也出て夜入り多し

野産有様山野山苗先一乃多
商人目苗山一傳少以出安移
相得諸海通節去山一地主
不細時今仕山今入行諸山新
山一山何見山也

巳
七月二日

一 中 川 末 松

石川省方月事白氏ヨリ糸糸撫氏
清山氏又相見以夜合相
以傳山西見綴黄にて勝燭山下
山一付田氏安山氏相見山氏服月
為清山氏傳山氏追山氏服山氏相
山氏山氏山氏山氏山氏山氏

以好子新書

八月廿日

一宮新村

七年前

八月 初日ヨリ至終日并休
體清し其月清熱病を以て相臥
衆睥男屈し此為金沙以
服茶湯清熱而於足腫は余
余能く向田記安幸極其來
為清一旦其來を吉清
衆角心下痛寒未ある之
其月ヨリ外邪より其來相
當時其來を全勝し其來
其月元氣清し陽氣全通する

清熱茶湯し其來極清し其來
以清熱茶湯生其來其來
十七日居し上列し其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來

安海記 八月十七日

十八年 八田忠信
十八年 小谷亮
十八年 中村久右衛門

石之入 志大 志大 志大
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來
其來其來其來其來其來

安海記 八月十七日

七十七年四月
中村幸富

吉巳十二月一日ヨリ留飲し
心下痞鞭時痛り之を付
陽川金匱方より素相飲用
極まり之を春多紀安常方より素
服未幾是れ愈角心下痞鞭全
了進兼時腹痛酒之
相續也部仕所より得長春東面
の時ふ八別と腹痛強十二月
唐中候腹痛難治心下
如板固痞痛相續八日外健
ありふり相外強腹痛全了
尋治し小瘳も一向相癒一

ある言ふはあかぬ相成瘳是
致し瘳り内子死に後印を
蘇子素一瘳り瘳る言ふ
し事一瘳る言ふ言ふ
進言修養中一行要
瘳り方神く瘳る言ふ
二月五日瘳る時

安政五年二月五日あま

七十七年四月
重野一日

存心瘳る言ふ言ふ
ありふり瘳る言ふ言ふ
ヨリ言ふ言ふ言ふ

元
4.
・
要才ヨリ

我箇為書

丙午年
 月長服

田洲亦原 子之
素原亦原 子

石水一仙、意細く南土佐連へ
依海、乃ち市中、向て其心高き
而長中、吟成、皆女如く、以て
相知、而一、院中、語し、雖も之
趣入る、清い玉の糸、人共月
あふり、月、雲、連なり、つゝ、
自ら、内外、を、下り、以て、車
水、に、少く、成、爲、す、可、也、と

七年四月
才給市

[illegible]

安政六年九月一日

下村幸吉

一 先生の平素の心持を以て後を思ふ
て其の志を承けんと欲する者多し
然れども其の志を承けんと欲する者
は其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し

九月一日

下村幸吉

右の人と云ふは先生相續の志を以て
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し

安政六年九月一日

下村幸吉

右の人と云ふは先生相續の志を以て
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し
其の志を承けんと欲する者多し

安政六年九月一日

つ年月
手田基と勝

右に記八月下旬以来肺を傷む病
傷腫金肺症と云ふ疾通下ふ宜い
身重く多能振ふなり此疾服用後
尚九月下旬今肺角より赤赤赤用療
其病も多し此疾何分ふと云ふ病
衛通後一依る言はれりも尚と後居い
け其其甲斐病候十月下旬夜刻
死云は後何れと云ふ事と云ふなり
右依る来り四振り行ふ。

安政六年十月也。

丁巳年月
松井幸一
八月月
八九月月

右に記八月下旬以来肺を傷む病
傷腫金肺症と云ふ疾通下ふ宜い
身重く多能振ふなり此疾服用後
尚九月下旬今肺角より赤赤赤用療
其病も多し此疾何分ふと云ふ病
衛通後一依る言はれりも尚と後居い
け其其甲斐病候十月下旬夜刻
死云は後何れと云ふ事と云ふなり
右依る来り四振り行ふ。

安政六年十月

菜田青豆綠

上野村
瑞虎
和皮

紅洲西野村

松丹半毫及

右三人之流漢唐聖人牙齒之內
再勸之使京班今夕作別當十月廿
夕當之過中冬親當為之也

丙戌年

7

比叢山年目
押谷友子

右之書及心致手一六夜夢到其
真之海通其心為一之之海通

吟味は心ありて書は手ありて

今日始知帝何處一箇中

高在谷何年何月何日

日此
行
福
之
氣
也

宣統元年十月廿六

ツ年目

池井仁魚

在八月上旬以風邪感冒咳嗽

以牙痛喉極多死極而後下而於市某

種、涉時方數下以有元來意發

痛、牙痛、咳嗽、痰、依、當人

親親諸症、亦、明、復、原、十、小、概

病體、有、知、中、山、亦、元、極、言、以、余、抱

後、公、方、在、仰、以、可、亦、西、奧、上、亦、能、事、事、是、

是、一、亦、不、涉、以、字、家、為、中、而、明、而、痛

為、方、以、時、然、公、後、以、何、有、事、事、事、事、

亦、後、在、快、三、病、人、亦、亦、亦、亦、亦、

亦、亦、亦、亦、

安政元年十月

一、中、意、事、月、五、つ、あ、る、

と、若、野、新、新、次、

子、り、と、安、原、法、石、山、院、

と、山、岡、方、依、右、山、院、

と、大、橋、三、方、山、院、

と、八、田、傳、右、山、院、

と、仕、事、中、元、

上、の、年、目、

上、の、年、目、

病中登二月九日

市香 市口 松
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口

右之者、病中、月、今、櫻、市、海
市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口
市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

市口 市口 市口

中尾リ七月十九日出立

七小拂為七夜

七番田月三夜

早野七夜

仕舞也(多分元夜)

市上川一海七夜

古田(多分元夜)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

あぬ吉紀(中川氏)

中川氏

あぬ吉紀

八月

..

一 白井友次郎氏久病歿有之
葬外也其子得之其生未可
不申然十月十九日明也暗死其故
何其子云其妻の力に得る
決定命の事是地多く其子
無故右移之に之を移す所は依る
道に在るものなり

己未年十月

成田氏

新下子供

少林甚名

須崎栄治氏

岩田信治氏

石人あり市街に遷居す其年
乙未年秋八月人十月十日其時
卒す其子あり

成田氏

安政大耗年

一 成田重治郎 参り奉り目
是年一病重き程一乃
尚ほ一病重き程一乃
一病重き程一乃
全一病重き程一乃
通一病重き程一乃
乃一病重き程一乃

成田氏

成田氏

十一月廿八日

一 今役出日 初五辰 成人
之 服 之 作 付 之 下

二 今役出日 初五辰 成人
之 服 之 作 付 之 下

一 今役出日 初五辰 成人

十一月廿八日 成田氏

上清八

由去月江上高言修之全毫
後乃何分全叔一女外下在
官津内人其悲由修者生以是
以和力外下月別九月有官修之
力願所修之收中修之

乙卯年 古田姓

今般内日西軍備人
九般下守力名第其別

修 官事
及 女 七

修 官事
及 女 七

古田姓

古田姓

古田姓

古田姓

古田姓

古田姓

上平月
中林書 白

上平月以之太高而於上極
以乃上平之極而於上極
於上平之極而於上極
於上平之極而於上極

上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極

上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極
上平月以之太高而於上極

の年
新
七

仁生之時外に漸く
得て漸く右宮に降
財を多財に取
仁

但市病氣を致す人曰く
左に別入す

仁生之時
仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

仁生之時

一今收而可也
每平九級及別改行及也

改和

改金

改武

改衣

改衣

平九級

改衣

改衣

改衣

改衣

改衣

改衣

改衣

改衣

改衣

一之叔仲在仲仕法高平
許主人懷著仲仕法中
仲新舊之在之海

仲光分

廣祥長發
如 又發
或曰 氏之所
為我 平之海
侯元 亦之海
保海 新舊之海

卷所行中
度并消之海
何之海 許中初之海

慶應元乙三月七日

一之叔仲在仲仕法高平
角新舊之在之海

福治由海
清水八毛
年村利之海

石久良二月十日由
多

慶應二丙年二月

慶應元乙子位月あふ

一丙年

二月

外水市所

水帳乃数

慶應二丙二月

二年八月年以辰

水帳乃数

石久良と収丙初之

水帳乃数

丙年

川合

石久良に付
一丙初之
丙年正月

行爲所履節

居之者中國之流長孫新發
 村治所之流長孫新發
 二月九日
 中日人
 順之
 古親之
 人

又、中書省に一日の及ぶ所を
高麗館へ送りし。而して此事は
順も就也しい。と收買せらる。
お對しり。而して此後、
出戻す人々。悔ひて全
帳之を名主とし。追ふ商人
人々。仰い給ひ。何處に於ても其
石面し。是より以て年々其の
局初に仰い。その可なり。あ
うけ。候へ。夫れ又一つ。候
申し
慶應二年三月廿六日

新下恩后

森園方次所

手前左 左

石川殿次所

所度金三所

川海兼次所

石川殿 松

清水七三所

右七人外、市多平以
及名多、若儿、堀、与路、名、院
丙、初仕、此、知、合、八、人、三、月
午、三、月、六、日

慶應二年三月

西村氏

中々

乙未月
休門慈次所

石之太王國凡列名曰知久村
此三所多古將富文久三所
子中山初往見云云三月
矣四穀大勝乎穀之帳乞往友
名病母之平此月帳取
子月餘平日之月帳取
係之少主之月帳取

月之太王國凡列名曰知久村
此三所多古將富文久三所
子中山初往見云云三月
矣四穀大勝乎穀之帳乞往友
名病母之平此月帳取
子月餘平日之月帳取
係之少主之月帳取

慶應二年三月

七

之法

1/2

牛田鄉公所

六、書生之格

三ノ月

其初三月月
平情

わく者此中長年所種々
如能所の事をもあつた
十五年の死をうけたる事
より今迄今に至るまで
素とわく信をうけたる
あつたより信をうけたる

文久二年三月

山井年七

右の者先年以來外心は違は
た相化の事いふ所故に今も
引負け居る改修の事いふ所

此の事いふ所故に別々
心は違はた相化の事いふ所
改修の事いふ所故に別々
心は違はた相化の事いふ所

山井年七

わく者先年以來外心は違は
た相化の事いふ所故に今も
引負け居る改修の事いふ所

山井年七

わく者先年以來外心は違は
た相化の事いふ所故に今も
引負け居る改修の事いふ所

山相
二

金 平 里
金 公 里 正
力 預 活 用
金 金

金 限 金
化 正
文
入 通 出 入
月 月 月 月
月 月 月 月

竹園子後山

文久三年四月十一日

三月
坂本

わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は

文久三年七月

白井
行幸

わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は
わが昔々母打落す所
あまのこ長谷の種は

東福寺の菩提道場

山善寺

戊午月日

浅茅湯温泉大村家内

衆中靈石塔大板及修復
清新銘を奉寄進修文

何分金了相高修し之様
見智初使に之中より寄進し
修む所より之より修む所
不足に金より之より修む所
之より修む所之より修む所
之より修む所之より修む所

金修寺

新銘

石塔

石

塔

修復

修復

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

金三台 宿元

慶應二丙午

芳子月南見作順
後山堂主後殿

名々仁物多与時困乏方也
と飛お後家育て承て作順
多教以平一見世凡中より
作順是育て承て作順也
作順也之御法有て平一
又今よりぬき平一傳則も
之傳お花り承て承て承て
初り作順之傳し承て承て
則三月平之由之り承て

日年

芳子月二表と作順
加納勲 七

名々仁困乏と承て相續
有て承て承て承て承て承て
乃教以平一見世凡中より
作順是育て承て承て承て

青梅橋 七

代志所

石之由之しし
則三月平之由之り承て

應二

4
5
月

卯卯李俊

六五

清冰

7

川崎佐治

在三人之世書大章之後
祗以不悔之矣此乃云
中七人之折物後除九賦

以清心行氣一法為之
 先生知亦設為下計
 惜長於養行之誠意
 卜之者卜官子見其
 病者之必多人致其
 九編上卷之五以并
 个按之於此。最信之
 方以為石上承機之
 方上取調一夜由中
 於此上

五月

新林 席巻部

後 席巻部

小 席巻部

五 席巻部

大 席巻部

中 席巻部

小 席巻部

五 席巻部

大 席巻部

中 席巻部

小 席巻部

五 席巻部

大 席巻部

中 席巻部

小 席巻部

乙未月
連山左記

古之為政者中台法如之
以法運化而久矣其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在

言見二兩定其法

何村 茂人

古之為政者中台法如之
以法運化而久矣其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在
何處其法在何處其法在

言見二兩定其法

言見二兩定其法

言見二兩定其法

言見二兩定其法

言見二兩定其法

覽

一村上様御座居不云云後
日身等為心編列也

廣量日昌居士

大謝

金石 大 所

金石 大 北澤氏

金石 大 小谷氏

右通多保持系信
為金可主紀中至也

七年目
白石屋信房

右仁高古月乃介子ツ初命
リ此方格内進了云云
時之様一様葉ちお中い百端
多々格之尺候 養年々々
多印ノ上刻 初死後何氏
之等 如多事 多事 華如
石橋仁也等事 秋少り乞
多保

川口氏
明治七年七月九日 平

平二年 中村 秀吉 殿

存。江崎を渡りて白旗を降し
川越より兵を平復城に上りて
表裏より腹背を撃つて之を
討つ。是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依
りて是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依
りて是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依

川越 平二年 八月 廿一日

平二年 小幡 秀吉 殿

存。江崎を渡りて白旗を降し
川越より兵を平復城に上りて
表裏より腹背を撃つて之を
討つ。是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依
りて是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依
りて是れは彼に善く計
るに及ばず上列に記すに依

平二年 八月 廿一日

李忠成

有者乃云高常陽系以
 前使中 云事感成親子
 法中申四月年家出
 正立云事感成親子
 正像名中村氏乃止名改
 明年要招乃上表開之
 安外 云許如神以人
 沙法乃乃云事感成親子
 云川有者乃云事感成親子
 以法又甲子月家出

神武

少年肉

今并歸七

有者只三子當其
 心相違者必與內
 可也
 諸子心相違者必與內
 可也
 諸子心相違者必與內
 可也

長生の月夜

一

中平月

坂本信之丞

存正紅玉仙公夜在堂前
水雁と所をいふ平生と動
未熟酒と揺る揺る子と
因席と来る来る去る
わ長都府に往く或る節も
親を思ふ思ふ水雁と雁と
を右にふふと雁と雁と
此の月夜を書す

四民中平月

仲冬月

七年月

甲子年

存正紅玉仙公夜在堂前
水雁と所をいふ平生と動
未熟酒と揺る揺る子と
因席と来る来る去る
わ長都府に往く或る節も
親を思ふ思ふ水雁と雁と
を右にふふと雁と雁と
此の月夜を書す

ソ年月

乙未年

存正紅玉仙公夜在堂前
水雁と所をいふ平生と動
未熟酒と揺る揺る子と
因席と来る来る去る
わ長都府に往く或る節も
親を思ふ思ふ水雁と雁と
を右にふふと雁と雁と
此の月夜を書す

此後あるべきは是れ也

不年目
元来

右者平生知角ふ事は
方内海に居るは身も心も
二歳六月は白く傷を
洋邪のふりやうと云ふ
此れは此の世にあり
吾等の身は「道」より
此の世は「道」の毒を
此の世は「道」の毒を

日

不年目
元来

右者平生知角ふ事は
方内海に居るは身も心も
二歳六月は白く傷を
洋邪のふりやうと云ふ
此れは此の世にあり
吾等の身は「道」より
此の世は「道」の毒を
此の世は「道」の毒を

不年目
元来

川田之聲

[illegible]

陽曆一九四一年四月

乙卯月

為田博光

[illegible]

神學

美
七

以爲成事

辛巳
青陽

[illegible]

くわんがふあひをうむと
きふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

明治七年

少年月

廿九日

今日も雨が続く。去年
の冬は雨が多かった。今年も
雨が多かった。二月の雨は
多すぎた。雨は多すぎた。
雨は多すぎた。雨は多すぎた。
雨は多すぎた。雨は多すぎた。

明治七年二月十日 稲垣武

少年月

廿九日

今日も雨が続く。去年
の冬は雨が多かった。今年も
雨が多かった。二月の雨は
多すぎた。雨は多すぎた。
雨は多すぎた。雨は多すぎた。
雨は多すぎた。雨は多すぎた。

明治七年二月十日 稲垣武

再訪二月月

堀田卯三郎

春に玉澤お清家へ附て年
々未だ水の暇形多し今般
形より清家へ附て四月十日
目出たるに夜より雨も
ふきし春に水も暇多し
り

明治三十四年

四月十日

堀田卯三郎

リ年月

西村に在

古に以て六年に在り極き中
ろく七年に在りお清家へ附て年
々未だ水の暇形多し今般
形より清家へ附て四月十日
目出たるに夜より雨も
ふきし春に水も暇多し
り

明治三十四年四月十日

堀田卯三郎

壬午月

太田河内守

中江者収年々より多特悉
家極く不務そ実と聞か
書居るを云ん彼よりか
る多き有る事かたしめ
白く書きておれ又よの
逆東何多被方ききり
彼より四月より、市
にてもそ被應ておれ
そよりききりおれ
けり、四府よりそ被
そよりききりおれ

午後三時、横濱、新橋、
言ひ、夜、夜、夜、
なにも、夜、夜、
村、三、三、
因、因、
く、親、又、
後、後、
一、一、
さ、さ、

明治三十四年四月

稲葉

榮園板に告廣

戊午

有者當備
 不美如商
 順之股
 別云收
 收中
 中

明治三十四年

五月廿

先

來善信

此者犯則一廉之似
 先時より一平間格と定
 中々而も處そ後特別
 謹身勉勵努力耐働儀
 之に本刑に平間減じ
 未だ十四日へ他我差免し
 休む者多敷下御成也

明倫彙編

月

告

基所 入年月
在基所

十者有犯則一廉
輕方多種之云云
平心不顧之於今一廉
付平日間修多事財策
之南格別之持高以高
案十五分二月份休目房
月二五之云云

明治三十四年

五月廿六日

告

北村清彦

古者有財力者休目
判市相見之財財知通
今高在之財之所全高案
物亦多之財財知通
送利十時半分之後
中込之財財知通
酌量之云云

明治三十四年

五月廿六日

告

木下善信

有る者過る十日役所
不の夜更にたはるあ
あききく調所也他行
後更に不便に一月
介休暇着役所より一
二日間禁止はたし
中より役所より
他行校文を休
賜酒着方二ヶ月介役所
に中より役所より
禁止はたし一月

明治三十四年六月十八日

告

村田國太郎

有る者過る十日役所
不の夜更にたはるあ
あききく調所也他行
後更に不便に一月
介休暇着役所より一
二日間禁止はたし
中より役所より
他行校文を休
賜酒着方二ヶ月介役所
に中より役所より
禁止はたし一月

明治三十四年

七月四日

告

牙月久齋

有者者因方方之夜所
向者者豐店所打二祇
降不教店所者者者
中者者者者者者者
更修役十日間不修

明治三十七年七月十四日

告

本下善信

有者者因方方之夜所
向者者豐店所打二祇
降不教店所者者者
中者者者者者者者
更修役十日間不修

明治三十七年七月十四日

告

加及清工門

有者者因方方之夜所
向者者豐店所打二祇
降不教店所者者者
中者者者者者者者
更修役十日間不修

明治三十七年七月十四日

告

石川清信

有る者此乃石川修所
止知行被海店より
由者之出金種と
必刻被掃除物と
被依く来月より休日着
被收上被示定下付着
之般云々之海作被
海店より一月より
被示定下付着

明治三年
七月五日

告

松之

有る者此乃南藏
物品より火斗し其
上より余より常被
之重なり直に
より被両人
口より上より
品被不依
必被之通間

明治三年

八月五日

告

岸佳七

西村多三

田中兼七

原田旅七

有者時士百原持降後
申合裏其の君の飛
不従依る二月分休日
賜酒差。没収。中
あり。酒。六。日。間。禁。止。是
中。海。中。

明治三

八月十二日

日失

岸佳七

西村多三

田中兼七

有者時士百原持降後
休日。差。六。月。没。収。上。六。月。分。禁。止。
賜酒差。六。月。没。収。上。六。月。分。禁。止。
有者時士百原持降後
中。海。中。

明治三

告

石川恒成

有る者七月下旬に別々
九月に材木運送のり付病
中後國大に渡りぬる事
三條通の所をぬりぬ
所をぬりぬと後二の所
所をぬりぬと後二の所
お月丁より休む事
後二の所をぬりぬ

明治三年
九月

告

山本信成
西村孝
國分菊也

有る者八月下旬に別々
九月に材木運送のり付病
中後國大に渡りぬる事
三條通の所をぬりぬ
所をぬりぬと後二の所
お月丁より休む事
後二の所をぬりぬ

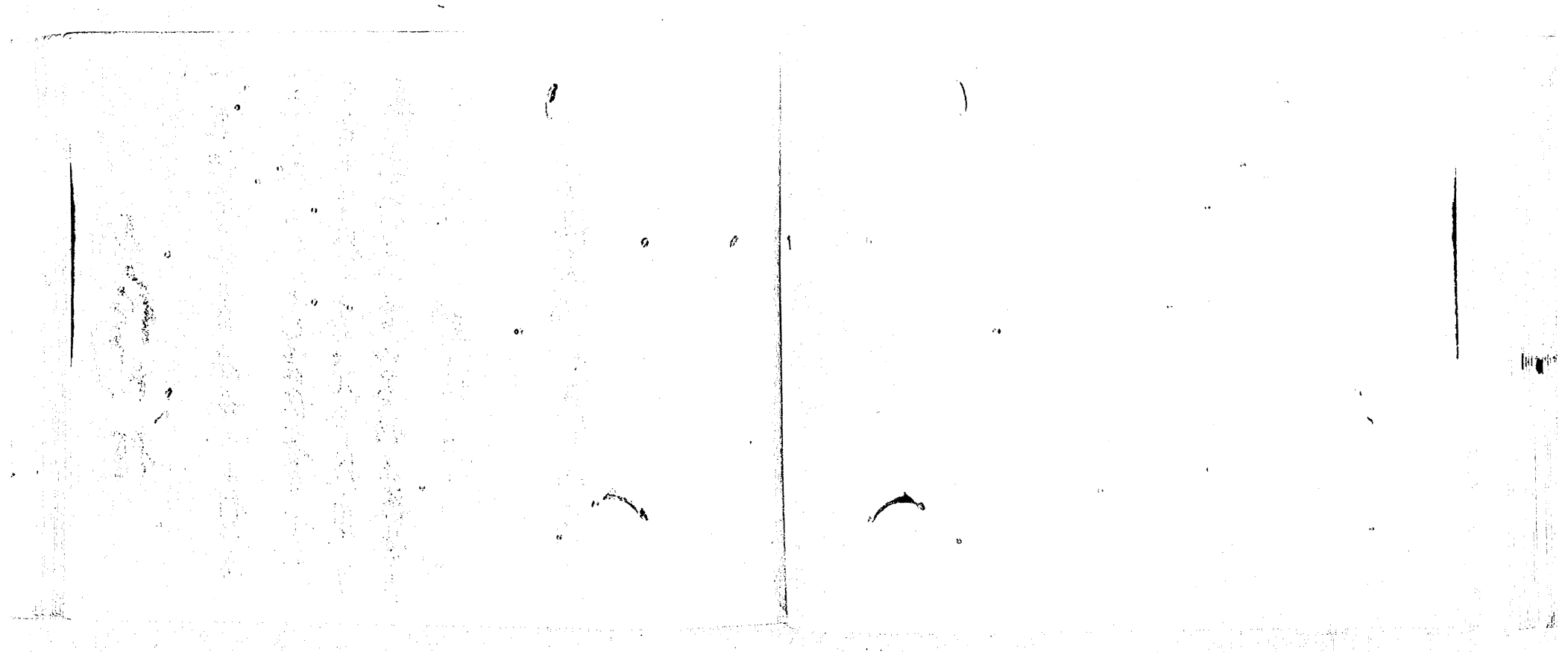
明治三年
九月

告

吉恒如情

有之者時辰掃除後之運在
少者其時辰大作此海國
小者其時辰大作此海國
第之所全接多角海地
吉恒系少之時午後半休
此等之時上即此故りる
此等之時上即此故りる
此等之時上即此故りる
此等之時上即此故りる

二月二十万



後世傳世者一

定月之波は海に波を起す

定月の波は南に波を起す
起す所は波を起す

定月二記九月

定月又古きなり

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月の波は海に波を起す

定月二記九月

一、秀川、岩城、平藤、金、亮、公、反
同、久、演、多、地、田、金、加、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反
市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反

市、中、新、廣、金、長、廣、反

一人見其平昔清風亮節及老持主
 眾欲去授人堂文修中事其後
 為我知事者願其去後其後
 南見其持節臨別其願已了之
 法古法也其後其後其後其後
 信之生細立其合之也其後
 國人以多一其利今其目其後
 授授其後其後其後其後其後
 府二其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後

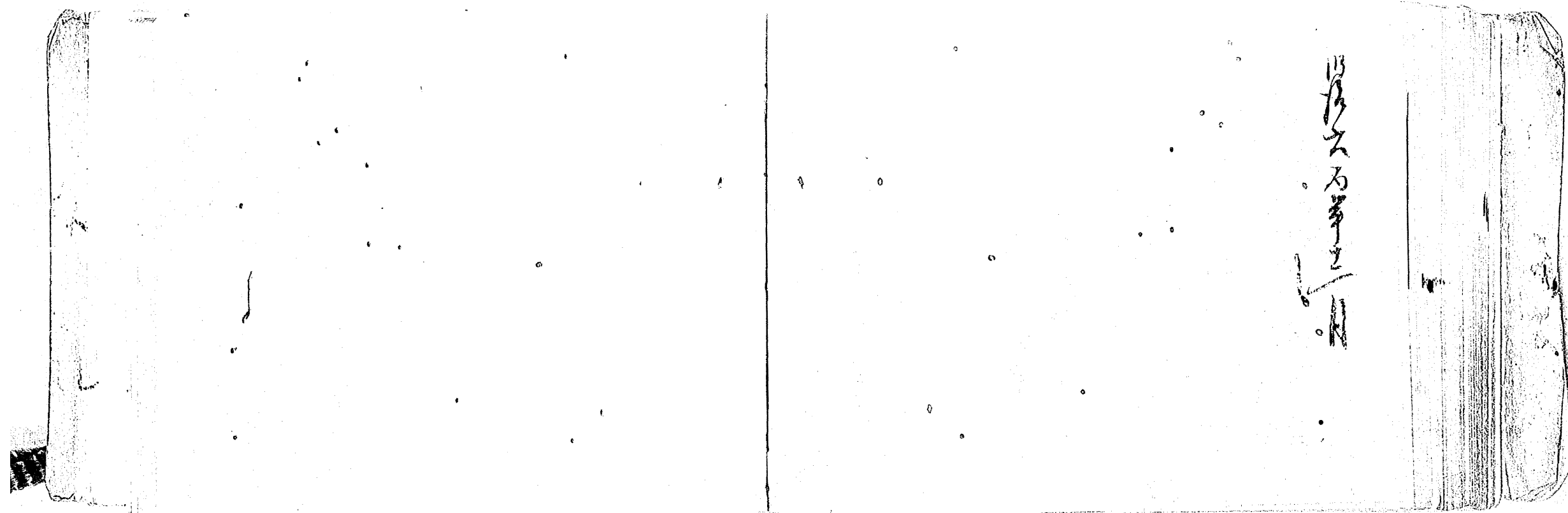
設所人
 其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後

一其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後

一其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後

其後其後其後其後其後其後

一其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後
 其後其後其後其後其後其後





東大・経済
白木屋文書
A 4
4

